

# 新資料 翻刻と紹介 室町時代物語『熊野の本地』と

## 『ハッあたのし大』

錦 仁

一 『熊野の本地』（外題・内題なし）

二 『ハッあたのし大』（内題）

ここに翻刻・紹介する『熊野の本地』は、秋田県大曲市内小友にある満友寺の所蔵する絵巻一軸である。書写年次の記載はないが、書体等により江戸中期の書写とみられる。巻末には、ほんのままにかきうつし「侍りぬ」と注記があり、元本があったことがわかる。

堅二六・二cm、長短一六枚の楮紙を継ぎ、全体で七五八・八cm。軸直径二cm。それぞれ、五四・〇、六七・〇、四九・〇、二二・五、二〇・二（絵のみ）、四二・〇、二一・二（絵のみ）、五五・〇（文と絵）、五八・六（文と絵）、二〇・〇、六二・〇（文と絵）、六五・〇、五一・七、五五・六（文と絵—二場面）、五六・〇cm。本文一行、約二四字。

このような料紙の不統一、三枚目から四枚目に移るノリシロの部分に絵の跡が見えること、また、裏打ちがしてあるところから、もとの絵巻を利用して、あらたに作り直したものと思われる。絵を省略し、ことばを省略し、元本より縮約された形になっている。

さて、その元本であるが、現在翻刻されている諸本を比較するに、

慶長頃の大型奈良絵本である、天理図書館蔵『熊野の本地の物語』（『室町時代物語大成』第四卷所収）であったことは、おそらくまちがいあるまい。翻刻にあたって、天理図書館蔵本と異るところには傍点を打って示したが、一見して異同の少ないことが判明するのである。

こうして諸本との比較によって満友寺本は、慶長頃の大型奈良絵本の写しとわかるのであるが、しかし、巻頭の相当に長い異文、それほどではないが巻末の比較的、長い異文、巻中に散在する長短の異文は注意しなければならない。これほど異文があるからには、巻末注記のように、「ほんのままにかきうつし」したものではないことになるからである。

巻中の短い異文は、元本の奈良絵本を写すときの、自由な、あるいは杜撰といってもよい書写態度によるものであろう。たとえば、（天理図書館本）ものゝふ、うけとりて、さきに、をいたて、

ゆきければ、さらに、あゆみやりたまはず、ものゝふ申やうは、せんし、かきりありて、われらかてにかゝりたまへは、ゆかしとおほしめすとも、かなふまし（79字）

（満友寺本）物のふ、さきに、おひたてまいらせて、ゆく、さらには、あゆみたまはず、我らかてにかゝらしと、おほしめすとも、かなふまし（49字）

となっている。すなわち、原文の意を汲みつつ、それを変えないほどに自由に書写を進めており、したがって満友寺本は、原文を簡略化しているゆえの異文をもつのである。

巻頭・巻末の長い異文は、元本の奈良絵本と非常に異なったものとなっている。満友寺本を作製するとき、その部分が元本になかったために、別の他本によって補ったものであるか。巻中の長い異文も、そうした事情によるであろう。

巻頭の長い異文をその他の諸本と比較するに、内容から、天理図書館蔵本と同系の本文をもつ、杭全神社蔵『熊野の本地』（『室町時代物語大成』第四巻所収）の方に近い。栄華の極みにいる王が千人の后をもつのに一人の子もないことを悲しみ、庭前の樹木に巢を作り子を育む小鳥をみて、我が身を嘆く場面は、杭全神社蔵本において天理図書館蔵本にはない。また、源宰相の子を后に立てるという記事も、前者にあって後者にない。巻頭の異文は、この杭全神社蔵本の記事を引いているようにもみえるのである。しかしこれも、天理図書館蔵本に対してのと同様に、文章は全く異っており、そのまま写したのではない。巻頭部分で杭全神社蔵本と同一のプロットを有するのは、他に大東急記念文庫蔵奈良絵本（『室町時代物語集』第一巻所収）、また類似のものに、パーク・コレクション蔵本絵巻（『在外奈良絵本』 角川書店所収）などがあるが、先と同様に、これらとも満友寺本は、全く異っている。

このようにみてくると、満友寺本の巻頭部分は、どの諸本とも異なるということになる。とすれば、巻末注記の「ほんのままに かきうつし 侍りぬ」は、そのままには信じがたいのである。おそらく書写者は、元本の奈良絵巻が損傷甚しく、巻頭部分が欠落していたので、それを補うに同系の他本を見て書写したのである。あるいは、それよりも、諸々の『熊野の本地』を見たり知っていたりして、その記憶によって後文と内容上つながるように配慮しつつ独自の異

文を作って書き補ったというべきかもしれない。そうした書写上の不都合を糊塗して、自本の価値を高からしむるべく、巻末注記が加えられたのであろう。ともかく、数多く残る伝本の中でも、流布本が形成され異本が生まれる過程がまざまざと窺える、貴重な一例といえないだろうか。

『熊野の本地』は、往時、非常に盛んであった熊野信仰を反映して、各地に数多くの伝本が残っている。それらは主に関東・関西に多いように思うが、満友寺本の所在も、大曲地方の熊野信仰を色濃く反映しているとみられる。満友寺には、もと壇家が所有していた、高さ一五cm程の、亀に乗った観音像と思われる素人の手作りになる彩色を施した木像が残っている。これは熊野の補陀落信仰がこの地において民間に浸透していたことを示すだろう。我々にとつてはいうまでもないことだが、『秋田風土記』（文化一二年 秋田藩士淀川盛品<sup>りた</sup> 『新秋田叢書』第一五巻所収）などをみれば、この地方はとりわけ熊野修験道、山岳宗教の盛んなところであった。その環境において満友寺本は、あるべきはずのものとして求められたものであったろう。

なお、菅江真澄の『簷<sup>のき</sup><sub>の</sub>金<sup>の</sup>棟<sup>の</sup>堂<sup>の</sup>』異文一（『菅江真澄全集』第四巻 未来社）によると、秋田市新城の神王寺宝蔵院に、当時、地藏菩薩の像があり、これについて「此地蔵大士のみがたに、副書一ひらあり、其詞に「紀州熊野本宮花園地蔵大権現之尊像、並、本地縁起巻物一本、右者讓汝者也、永、後代可奉尊護者也、」とぞ見えたり（傍点筆者）と記している。この記事では、実際に「本地縁起巻物」があったのかどうか不明であるが、これは花園地蔵の縁起であったろう。あるいは紀州熊野より伝わった『熊野の本地』に相当するものであった可能性も考えられるかもしれない。神王寺は、常州から移住した修験者の寺院で、二十五ヶ寺を配下にもっていた（『修験と社家』佐藤久治 『菅江真澄と秋田』加賀屋書店）というが、このよ

うな修験道の全国幅広い活動によって、各地に本地物と称する縁起の類がもたらされたものであろう。

## 二

次に翻刻・紹介する『ハッあ[た]のし大』は、山形県南陽市元中山日影にある、もと羽黒山寂光寺の末寺で修験道の流れを汲む成就院の蔵する小型の草子である。残念ながら、この草子は途中で切れており、その前の方だけが残っている。

堅十四・二cm、それぞれ三四・三、三五・三、三五・〇、三五・五cmのほぼ同じ長さの楮紙を継ぎ、全体で一四〇・一cm。一行約一二字。紙の初めの部分、約一〇cmを裏打ちしており、もと卷子仕立てであったと思われる。最初の天地に損傷があり、判読不能などところがあるほか、本文に意味不明な字句も少なくない。

成就院には、さらに、『いなりの本地』二本が残されており、その一本は天和二年（一六八二）の書写であることが記されている。本草子は、これと同筆なので同じ頃の書写になるものである。また、弓術の作法書とみられる巻紙状のものなどが残っている。当時は、同じく所蔵の「院号之事」という文書によって、元禄三年（一六九〇）八月五日に、「羽黒山寂光寺先達権大僧都法印吉祥院」により、院号の付与があったことがしられる。弓術の作法書は、羽黒山の配下にある修験の寺院であるゆえに伝えられたものであろう。

『ハッあ[た]のし大』については、すでに、錦三郎が昭和三〇年に『社会科資料 日景・花窪・諏訪原・小岩沢（ガリ版刷 私家版）』という小冊に翻刻・紹介し、多少の解説を加えている。その後、二五年が過ぎ、もとより部数僅少と紙質も製本も粗悪であったため、現在は著者の手元に一冊を残すのみとなった。一に翻刻する『熊野の本地』もそうであったが、『ハッあ[た]のし大』も修験道との絡みで

奥深い山の中の小寺院にもたらされ、伝えられてきたと思われる。いわば、宗教的活動上、何らかの意味で必要とされたものであった。室町時代物語（中世小説）を考えると、このようにして東北地方の各地に残された事実を無視してはならないだろう。すでに紹介済みのものであるが、錦三郎の小冊子が一冊のみとなったことでもあり、成就院に問い合わせたところ二五年前には確かにあった『いなりの本地』二本が紛失して今はないということであり、危惧を覚えあらためてここに翻刻し紹介することにした。

さて、本草子は右に記したように、意味不明の字句、損傷による欠字があり、しかも一mばかりしか残っていないが、そこから判断される物語の内容は、大体、次のとおりである。

黄帝王の御時、その忠臣である貨狄かぢのただ一人の姫を箱状の小舟に籠めて、悪風の吹く海に流し、逆臣である蚩尤しゆうのいる国へ赴かせた。そこで蚩尤の妻となり、七年間を過ごして七人の子を設ける。それは蚩尤の肉体的弱点を聞き出すための冒険であった。姫はそれを聞き出すと、一番小さい乳呑子を連れて逃げ、十一面観音の願力によって無事、戻って来ることができた、という話である。本草子はここで切れるが、この後、黄帝王と貨狄が蚩尤を滅ぼすという話がつづいていたものであろう。

女性の犠牲的冒険によって悪臣を倒すという話は、室町時代物語にしばしば見られ珍しいものではないが、本草子が注目されるのは、謡曲『自然居士』の、舟の起源を述べた次の一節とのかかわりにおいてである（ほぼ同文の記事が『曾我物語』巻八にもある）。

そもそも舟の起り尋ぬるに、水上黄帝の御宇より事起こつて、流れ貨狄が謀り事より出でたり。ここに蚩尤といへる逆臣あり、かれを滅ぼさんとし給ふに、おう江といふ海を隔てて、攻むべき様もなかりしに。黄帝の臣下に、貨狄といへる士卒あり、ある時貨狄庭上の、池の面を見渡せば、折節秋の末なるに、

寒き嵐に散る柳の、ひと葉水に浮かみしに、また蜘蛛といふ虫、これも虚空に落ちけるが、そのひと葉の上に乗れりつつ、次第次第にさがにの、いとかなしも柳の葉を、吹き来る風に誘はれ、汀に寄りし秋霧の、立ち来る蜘蛛のふるまひ、げにもと思初めしより、たくみて舟を作れり。黄帝これに召されて、おう江に漕ぎ渡りて、蚩尤を易く滅ぼし、おん代を治め給ふこと、一萬八千輪とかや。しかればふねの船の字を、公に舟と書きたり（岩波古典文学大系『謡曲集』上）

物語の展開に違いが見られるが、本草子との類似は十分に認められるだろう。舟の起源説話は、中国の故事を集めた『韻府群玉』などにもあって、『自然居士』の一節が何を典故とするか速断はできないが、あるいは『ハッあ[た]のし大』の原本がそれであったかもしれない。そういう可能性を想像させずにおかないところに、この草子の魅力があるといえるだろう。

## 凡例

- 1 翻刻にあたっては、可能なかぎり原文に忠実であろうと努め、次の諸点に留意した。
- 『熊野の本地』
- 1 底本の漢字を仮名に改めたり、仮名を漢字に改めたりすることはしなかつたが、旧字体の漢字は通行字体に変えた。
- 2 読みやすくするため適宜、読点を打つとともに、改行を試みた。
- 3 絵の入る箇所は、たとえば（絵第一図）というふうに記して示した。
- 4 満友寺本の元本である天理図書館蔵大型奈良絵本『熊野の本地の物語』と比較し、元本にない語句・文には傍点を振った。

- 5 同じく比較し、天理図書館蔵『熊野の本地の物語』の絵の部分に相当する箇所は、たとえば（天理図書館本 第一図―三図）というふうに記して示した。

## 『ハッあ[た]のし大』

- 1 『熊野の本地』凡例の1と同じ。
- 2 読みやすくするため、適宜、読点を打ったが、改行は行わず原文のままとした。
- 3 墨で字全体を消した跡のある箇所は、字の左側に傍線を引いて示した。
- 4 損傷のため判読不能な箇所は、□で示し、字の一部が残って判読可能な箇所は、□の中にその字を記した。
- 5 読みやすくするため、本文の右側に漢字を記した。
- 6 脱字と思われる箇所は、その右側に（ ）を付し脱字を補った。

## 翻刻

### 熊野の本地（外題・内題なし）

れり、  
 そも、そも、ほん国あきつしま、なんかい一の、大りやう、こんけんむ、おはします、こむけんと申けんは、くれうりもん、一天しかいはひこ  
 り、  
 むかし、天ちくに、まかたこくと申国あり、かの国に大王まします、御名をは、せんさいわうと申ける、一天四かいのあるしとして、七  
 そん万ほうかきりなし、  
 十万人のくきやう、れいぎまつる事、めてたくましますやう、りうの  
 床の上には、にしきのしとねをしき、南てんのゆかのうへには、き  
 んきむのいさをちらし、せうちやくきんくのこのをと、雲のうへ

に、ひまもなし、ひはねうとうはつのは、宮の内になえせず、あなめてたやとそ聞へける。

さて一人の王子ましまさぬことを、あさ夕なげかせたまひける折ふし、なむてんの桜の木すゑに、ことりのすをくひて、子を、はこくみけるを御覽して、そもそも、頃鳥、いかなる法を聞てか、子を、はこくみそたてつらん、我身、大國の王として、千人のきさきおはしませとも、一人の王子おはせすと、かなしみ給ふそ、あはれなる、源牽相とりやのひめ君、とし十三の春の頃より、内へいりつ、こすいてんにそなはり給ふ、かすみのかんさし、うつしく、花のすかた、たくひなく、なのめならずにましませとも、大王の御おほえすくなくて、御身のうき雲はれやらず、月にはおよそなる御うらみのみなり、つねに心をすましつ、かんをんをあかめたまつり、かうをたき、夜る昼、御名をとなへて、大王の御おほえをいのらせたまひけるとかや。

(二行分空白) (天理図書館本 第一図—三図)

さるほどに、六年と申十月の頃、御門、御心しつかに大しんくきやうなみわたるに、女きさきを、かぞへ給、女御は千人とこそおほゆるに、いま一人、いつくにおはしますらんと、ありければ、ある大しん、申給やう、頃にしのかた、こすいてんにおはします、いと御心ほそけに見へさせ給ふ、あはれにおはします、と申給へは、其時、御門、さる事ありと、思ひ出させ給ひて、としをかそへ給へは、ことせに成ぬ、いとおしや、とし月をおくらせたまひ、いかばかりの事をか、おほしけんとして、やがて、ぎやうかうならせたまひけるとそ。

(天理図書館本 第四図—六図)

仏の御しるしなれば、いかてかおろかならん、大王の御おほえなのめならず、やがて、こすいてんのきさきになしたてまつり、御おほ

えあさからす

けふよりのちは、我とおもはむ人々、みな、こすいてんのきさきをもてなしたまへと、せんしありければ、大しんくきやう、殿上人たち、十万よ人の人々、いかにもして御てんに入らんとて、まいりつどふ事、花を折たるかことし。

いつかたへも、きやうかうならず、うちたへ、こすいてんにおはしければ、残りのきさきたち、なきかなしみておはします。(天理図書館本 第七図—九図)

中に、ひめ宮にても、まふけのきみ、おき給ひたらんを、一のきさきに、そなえまいらせんと、おほしめす御きとくあり、こすいてん、かさねて、かんをんにきせひ、申させ給へは、程なく、たい人したまふ雲の上は、申にはおよはず、あまてる下までも、悦あへる事、かきりなし。

(二行分空白) (天理図書館本 第十図)

さる程に、きさきたち、頃よしをき、たまひて、いか、せんと、かなしみ給ふ、我々もいさや、かんをんにいのりたてまつらんとて、七日たんしきして、こすいてんのはらにやとらせ給ふ、御子うしなひたまへと、さんてんをも見給へとも、何とも聞へす、いか、はせんと、めんめん、かなしみ給ふ。

一人のきさき、のたまふやう

いさや、はかせをめして、けんわうか、あく王か、まづきかんとて、ならびの国、ふしこくといふ所に、こしかたゆくすへのこと、しりたるはかせあるを、めされけり、頃にしのかたに、こすいてんと申女御のはらに、やとらせ給ふは、けんわうか、あくわうか、うらなひしお申と、仰ありければ、かゝるおそろしき事とはしらすして、大さんをきて、ふみのおもてを申やう、およそ、心ことはもおよはぬめてたき君にて、はたらせたまふ、ひたひには、月日をもち給へり、御たんしやう日より、天下あんおんにして、人たのしみ、

三さいにてとよ、宮えたち、七さいにては、御くらしいにつき給ふへし、ちゝはゝの御ため、めてたき御子なり、と申す。

其時、きさきたち、色をうしなひて、あさましき事成とて、さう人をうらめしき人かな、九百九拾九人のきさき、これほとにかなしむ侍るを、かやうに申こそうたてけれと、仰有ければ、よくもなき所へまいりたる事よと、あさましくおもひて、何かの事は、しりさふらはす、かみのおもてにあるまゝに、申けるなりと申せば、ふみのおもてになき事を申つれば、七とまてしたなき物とむまれ候なり、たゝ我らが申さんまゝに、おはしませさらは、はかせをうしなはんする、そのみならず

(一行分空白) (天理図書館本 第十一回―十二回)

扱、いさ、せ給へは、大王の御前にまいらんとて、きさきたち、こすいてんに引つれてまいり給ふ、頃よし、そうし申せば、大王ふしきにおほしめし、さはかせ給ふ、何事のまいり給ふそと、とはせたまへは、其時、きさきたち申給ふやうは

御すいてんの御くわい人と、うけたまはり候、めてたくおもひまいらせ候、その御悦にまいり侍るなり、よその人を、めしつかはせたまひ候はんより、我らを御もりのめにとにも、めしつかわせたまへ、又、かやうの御事には、うらと申ことの候ぞかし、ふしこくに、こしかたゆくすゑの事をしりたる、さう人の候か、こへてさふらぶ、御うら、とはせたまへと申給ふ

大王、聞しめして、さらは、こなたへとて、めんめん、よひ入たまいぬ、頃きさきたち、まるか事をおほしめしてこそ、かくはのたまへ、とて、いみしく御悦あり、

さて、はかせをそ、めされける、これほどの大事の御うら申さんに、たゝ人にては、すなはち、大ものさしぬきに、しゆいのかふりを、たまはりて、にしきのゆかに、しやうじ入給ふ

はかせ、身の気もよたちはたる、これほと、ありかたくもてなし給

ふに、さていかゝせんと、あんしはつらひて、きさきたちの御かほを、まほりたてまつりけり、

あるいは、あをく、あるいわ、白く、御かほ五色にへんして、いかか申さんすらむ、とて、手にあせをにぎり給ふありさまを見れば、ひとへに、をにのことし

ちからおよはず、まへのやくそくのこどく、うらのおもてをそ、さうし申ける、大王、聞しめして、よしよし、何事もめてたし、たとへ、またた国の内に、人一人もなくならむ事も、ちからなし、三とせに成たまはん東宮と申、七さいになりたまはは、くらいをゆつりたてまつり、其後は、まろかくひを、めされ候とも、何かわ、くるしかるへきと、せんしありければ、きさきたちは、色をうしなひてかへり給ふ、はかせ、かすの御ひきて物、たまはりて、空おそろしき事、かぎりなし

(四行分空白) (天理図書館本 第十三回)

また、きさきたち、よりあひて、いかゝはせんと、せんぎし給ふやうは、大王をおとしまいらせんとて、たけ七尺の女を、一人して、十人ツゝ、かほにすみをぬりて、身には、あかき物をきせて、かなはを、さかさまに、かしらにゆりつけて、三のあしに、らうそくをとほして、うしの時に、こすいてんにをしよせて、いちとうに時をつくりて、いふやう

この大王に、あくわう、はらめるきさきあり、こよいの内に、大王、もとの大りへかへり給へ、さらすは、頃よのうち、十万のけんそく、ことごとく、うしなはん、明日、馬のこくに、大王の御かへり、をまちたてまつる、其後、てんに、あかるべしと、三度まで、さげびける

絵 第一回 (天理図書館本 第十四回―十六回)

其時、大王、おほきに御さはきあり

かなしきかなや、丸か王子、一人も侍らず、たまたま、出きたまわんとすれば、天よりあまくたりて、かやうに申事のかなしきよ、はか身、一人ならば、ちからなし、けんそく、あまた、とりうしなはむ、とふこと、のふひんさよ、頃うへは、御うらみもあらしとて、御いとま、こはせたまひつゝ、もとのたいりへ、かへりたまふ。

人けん物ならはこそ、いつくえも、かつへたてまつらめ、ひとへに、まゑんのものとおほしめして、もろともに、きぬ、ひまかつき、ふし給ふ。

さてしも、あるへき事ならねは、なくなく、出させたまふ、きさきは、たゝ、ゆめのこゝちして、なきしつみたまひけり、三万よ、めしつかはれし人々も、みな、おそろしとて、一人もなく出ける、御めのとばかりそ、いかならん道までもとて、つきたてまつりける、きさき、のたまふやう

たゝ、いつかたえもおちて、命いきて、我けうやうを、してたひ給へ、ともにうせては、のちの世をは、誰かは、とふへき、とそ、のたまへは、けにも、と、おもひて、なくなきうてたまひぬ、きさきは、なきふしたまへり

(四行分空白) (天理図書館本 第十七回)

大王かへり給と、きこゑければ、きさきたち、しほせたり、とて、悦たまふ

さて、いかにしても、御すいてんを、うしなひたてまつらん、とて、又よりあひて、さゝめき、せんきしたまふやう、

御すいてんのきさき、はらみ給ふ王子、きわめて、あく王也、むまれたまわさらん、ききに、これより、みなみ、十四五日、行過て、こんしやうの山ひた、とくわうのふもとにて、菊水の所、ほんとうのいはやのまへにて

## 絵第二回

御くひを、きりたてまつるへしと、かきて、つるきをそへて、大王のせんしとて、ものゝふ、十人めして、つけられけり、すなはち、せんしをたまはりて、御すいてんにまいりて、たからかに、よみあけけり、きさきは、とかく、物ものたまはず、ゆめ見る心ちして、こは、いかに成ぬる我み、なるらん、雪しもならば、き

えもうせなんと、もたへ給ふ、いかなる、さきの世のむくいにて、ものゝふ、のてにかゝり、かゝるうきめに、あふらんと、きぬ引かつき、ふし給ふ

物のふ、申やう、はるはるの道にて候、とて、いつくにそ、いと、心もきえ入やうに侍る、物のふ、御ゑんに、あかりて、みすを、なきなたにて、きりおとし、出たまはずは、内へまいり候へしと、申その時、おきあかり給ひて、しはしは物ものたまはず、けさまで、大王、すませたまへる所へは、何とて、さうなく、まいりけるぞや、とて、なくなき出させ給へは、おりふし、みすに、御くし、かゝりて、

(天理図書館本 第十八回―二十回)

つきそひし、人にはなをも、まさりけり

われをとゝむる、玉のすたれば

いかはかり、うれしからまし、ゆくすゑの

はるけきしての、山ちこゆらん

御まぐらの、しやうしに、かきつけて、出給ひけり

(一行分空白)

物のふ、ききに、おひたてまいらせて、ゆく、さらに、あゆみたまはず、我らかてにかゝらしと、おほしめすとも、かなふまし、あゆみ給へと、せめければ、これや頃、こくそつの、さい人を、おひたて、せむるも、これにはすきしと、おほしめす、いつくをふむとも、

おほえず、心はかりにて、四五日程、あゆみたまひつるが、その、ち、かきたえ、御あしもはたらかす、ちなかれ、山の中に、なきふし給へは、もの、ふ、はらをたてて、くるひけるに、その中に、心有物の、ふ、まきのむまをとりて、藤のかはを、くらに作りて、のせたてまつりけり、なくなく、ひたとくわうのふもとへ、ゆきたまふ。

(一行分空白) (天理図書館本 第二二図)

さて、つるきをぬきて、御くひを、うたんとするに、つるきは、ぬけさりけり、いころしとらんとすれば、ゆみもおれけり、物のふ、ふしきのおもひをなして、あきれいたりその時、きさき、みつからかはらに、わうし、おはしまさんとは、よも、つるきぬけし、いま十五日、待たまへ、このわうし、むまれたたまひてのち、くひをうてと、仰有

物のふ、ちからなく、山の中に、月日をおくりけり、きさき、ほけきやう、あそはしつ、(天理図書館本 第二二図)、ほとなく十五日も暮にけり。

さて、きさきは、御はらを上下になて、のたまふやうた、いま、くひをとられ、うきめをみんする事も、御身ゆへなれば、ちからなし、恨と、おもひたてまつらす、然るへくは、我くひのきられぬさきに、むまれたまへ、心やすく、見をきたてまつりて、露の命、はかなく成侍りなん。

と、かきくとき、のたまへは、十せんのくらみをうけし御身なれば、なとか、聞しりたまはさるべき、御はら、すこし、うこきつ、程なく、むまれ給ふ、玉のやうなる王子、いでおはします。

きさき、これを御らんとして、御涙せきあへす、あはれにかなしき事、いはんかたなし、岩をみなみに、枕にせさせて、きぬ一かさね、きせたてまつり、おとなしき人に、物をいふやうに、さまさまに、のたまは、とら、おほかめをは、もり、めのと、おほしめせ、

草木のおひか、らんをは、ち、のたちか、り給ふと、おほしめせ、雨露のか、らんをは、めのとの御うふゆ、まいらすると、おほしめせと、のたまひて

身なし子を、このやまもとに、すてをきつ

あはれ見たまへ、かみもほとけも

山の神、御返事とおほしくて

みなし子と、おもひなはひそ、けふよりは

我はこくまん、よろつよまでも

また、きさき、かくそ詠しける。

いかはかり、うれしからまし、みなし子を

よろつ世までも、そたてたまは、

絵第三図 (天理図書館本 第三三図—二四図)

扱、其後、物のふに、いまは、とくとく、はからへと、のたまへは、心なき物のふも、みなみな、袖をしほりけり、さて、有へきにあらねは、御くひをうつ、つるき、その時そ、ぬけにける、心有物のふは、なくなく、かへり、とんせいするもあり、のこりのつわもの、御くひを、つるきにそえて、かへり、きさきたちの御なかに、まいらせければ、おのおの、よろこひ給ひて、きぬ、十かさねつ、たひにけり。

さて、御くひをは、一の御馬やのしたに、おさめ給ふ

絵第四図 (天理図書館本 第二五図—二六図)

さて、御くひは、きれたり、されとも、たいしやくに、一日に三度の御いとまを申て、この山にきたりて、三石六斗のちふさを、とめをきたたまひて、四さいに成たまはんまで、わうしを、そたてま

いらせんと、ちかひ給ひけり、  
其しるしにや、御むくろは、つゆほともたかはす、おさなくましま  
すほとは、さるが、いたきたてまつりて、ちふさを、まいらせけり、  
頃山に、一万八千のけた物あり、山の神、よるひるは、人をすへて  
わうしを、しゆこし給ふ、さるとも、ならのは、くすのはを、つら  
ぬきて、きせてまつり、よろつの木のみを、ひろひて、まいらせ  
つ、なかぬ月日なれば、はや四さいにならせたまひぬ

(一行分空白) (天理図書館本 第二七図)

三月十八日、きさき、御むくろながら、わうしに、むかひたてまつ  
り、のたまふやう

あさましきかたちを、とゝめおき、三石六斗のちふさを、はこくみ  
たてまつり、いまは御心もつき、おとなしくならせ給へは、うれし  
き事也

あさましきかたち、御かくし侍れと、我あに、きおんしやうしやに、  
ひしりにておはしますに、つけたてまつらん、さためて、御むかひ  
に、まいらせたまはんする、おはしまして、わかのちの世をも、と  
ふらい、ちゝ大王にも、しられたてまつりたまへと、なに心なく、  
あそひ給ふ、御みゝにきこゑたまふ、ふしきのおもひを、なしたま  
ふ所に、御むくろは、かきけすやうに、うせ給ふ

王子は、いかにせむと、谷にくたり、みねにあかり、なきかなしみ  
たまふ事、かきりなし、さても

(一行分空白)

きおんしやうしやの御ひしりに、一日に、とつ、おやの御けうや  
うのために、よみ給ふ、むしくひ、あり、あらふしきやと、おもひ  
て見たまへは

身なし子を、そたつる山は、地こんしやう

たつねでも見よ、きおんしやう人  
と、ありければ、ふしきにおほしめして、日ころ、さりぬへき御て

しかな、あとをも、ゆつらんと、明暮、おほしめしてありければ、  
いかなるたつとき人の、あまくたりけるやおほしめして、千人の  
御弟子を引くして、地こんしやうの山を、たつねたまふに、ひたと  
くわうのふもと、菊水の所、はんとうの岩やのまへに、うつくしき、  
はたかなる若きみの、四、五さいになるか、あり、とら、おほかみ  
の中に、まははり

絵第四図

上人いたきつ、これは、いかなる人にて、おはしますそと、とい  
たまへは、こすいてんの御へらに、やとりし王子なり、上人は、我が  
ために、おちにて、おはしますと、おとなしやかに、のたまへは、  
見るやうに、あさやかに、のたまふ

やかて、この山にて、せんふの御きやう、あそはして、きさきの御  
とふらい、ふかくし給ふ、(天理図書館本 第二八―二九図)

王子より外に、大事なしと、もてなしあつかひ給ふ、さる程に、き  
おんしやうしやにこそ、うつくしきちこ、はたらせ給へとて、世の人、  
申あへり、月日たちゆくまゝに、七さいにこそ、ならせ給ひけれ

(天理図書館本 第三十図―三二図)

さても、大王、こすいてんの七年の、けうやう、せんとおほしめして、  
きおんしやうの上人を、しやうしたてまつらん、とて、御むかひを  
まいらせ給ふ、御返事あり

ないない、王子をも、つれたてまつらんと、おほしめす、こんとのせ  
つほうをは、みつからに、せさせて、たひらへと、のたまへは、めつ  
らしく、うれしくて、上人、大によるこひ給ふ、大りへ、つれたてま  
つり、まいり給ふ

御門、まつ、ちこそ、御らんして、あなめてたの少人や、いかなる人  
の御子にて、おはしますらんと、たつねたまへは、知人のもとより、

とはかり、御返事あり

さて、御年は、いかにと、とひ給へは、七きいに成たまふと、のたまへは、大わう、御なみたをなかし、御かふりを、地につけたまひて、しはらくありてのち

あはれ、いかなる人か、これほと、うつくしき子を、もちたまふらん、御すいてんの御はらに、やとりしか王子にて、ましまさは、これ程にこそ、あらめと仰ければ、上人、御なみた、せきあへす、けたつの御たもとを、しほりたまひけり

(二行分空白)

(天理図書館本 第三二図―三三図)

扱、御たうをたて、くやうを、のへ給ふ、やかて、せつほう、はしまりて、頃ちこ、ゆすに上り給ふ、みかど、いとふしきに、いとをししく、おほしめしける、はくのきさき、かの王子に、のりうつり給ひて

きさきたち、はかせをめして、とひたまふやう、おそろしけなる女をつくり、大わうを、おとし給やう、きさきたち、せんしなりとて、つるきを、物のふに、たひし事、又、王子、御はらに、ましますとは、御くひ、きられざる事、つぶさに、ときたまへは

御門、聞しめして、さては、ふしきにあはれ成事、ありけるよ、とて、御なみた、せきあへす、大しんくきやうも、みなみな、なみたにむせひ、なおしの袖をそ、しほりける

これを聞人、あるひは、しゆつけし、あるひは、入道して、仏法三まひにいり、むしやうのことはりを、けんして、はりなく、うき世のましはりを、と、むる人もあり、頃せつほう、ちやうもんして、仏道しゆきやうに、おもむく人、かすをしらず、あはれなる御事也

(一行分空白)

(天理図書館本 第三四図―三五図)

大王、せんしあり、けふのせつほうの御ふせに、いかやうの事にて、も、御のそみに、したかひたてまつるへしと、のたまへは  
たから、又、つかさ、くらるもほしからず、一の馬屋のしたに、ほ

りうつみて候、こかねのはこそ、ほしく候へと、仰ありければ、頃よし、大王、聞しめして、あらふしきや、いかなるはこにて有らん、見よと、ありければ、きさきたち、これを聞たまひて、あら心うや、我らかしたる事の、あらはれむ事よ、とて、おのおの、あきれ給ふ、人をつけて、まほらせたまへと、かなはず、ほりあけ侍り、大王の御まへに、もちてまいる

あけて御らんするに、御いろもかはらぬ、いにしへの、こすいてんの御くひなり、ふしきのおもひを、なし給ふ

はけもの、とりうしなひつるかど、思ひければ、こは、いか成事そと、せんしあり

其時、ちこのたまふ、これこそ、みすらかか母、こすいてんのきさきはらの、わうしなりと、しかしかの事、ありのまゝに申給

御内、聞しめして、くちをしの事ともやと、おほしめす事、かきりなし、さて、ちこをは、と、めおきまいらせて、其日、吉日なりとて、やかて、御くらるを、ゆつりたてまつりたまひけるとそ

絵第六図

(天理図書館本 第三六図―三七図)

ひたとく王のふもとに、寺をたて、五百人の僧をすへて、れいの声、見ゆる事なく、ひ、きはたりて、きさきの御あとを、とふらひたてまつりの、大王も、御しゆつけありて、ねんしゆ、ひまなく、御とふらひ、ありけり

絵第七図

(天理図書館本 第三八図―三九図)

さて、御かとは、女御きさきも、おもふしきい、あれは、しはしとて、すへたまはず、御おこなひのみ、ありて、何くれ、すくし給ふに、御とし十五と申せし時、まかたこくは、女のおそろしき国なり、

とて、とひくるまを、つくらせて、大王も御門も、きおんしやうしやの上人、三人めして

このくるま、おちつかんところに、あとをたれんと、ちかいて、とはせ給ふ程に、大日本国、紀伊の国、むろのこほり、をとなし川の河上に、くまの三所こんけん、あらはれて、両所こんけんと申は、大王ときさきとの御事也、せうしやうてんと申は、きおんしやうしやの上人なり、にやくわうしとは、しん王の御事也、新宮、ほん宮とて、三の山を、りやうし給ふ

めあこぎと申は、きさきの御母御せん、源宰相と申は、おなしく、ち、御せん、ふちしろわうしと申は、まきの馬の事也

これを、もてあそはん、ともからは、二世のねかひを、とけ侍るへし、こむけんの御ちかひ、くらのあま入道、おとこ、女を、きはらす、みちひかんために、ほんかくしん女の、みやこを出て、ふたんと、このちりに、ましはりたまひしより、このかた、りもんりしやう、御心さし、しはらくも、やむ事なし

しかれば、すなはち、うろむろの道を、ふみはけて、九ほんしやうせつを、つうし、とうみやう、二かくのさとりをひらく、ゆへに、九ほんわうしやう、うたかいなし、一たひ、頃山にまいるものは、二とうふさうのしやうりのゆへに、あつかりて、まさに、たうちやうにさして、よきふつの家に、しやうせん物なり

ほんのまゝに、

かきうつし、

侍りぬ

ハッあたのし大

かうていをふの御時、しゆ

頃あしわらこくを、たやしき

くにし、ついに、なかつへき

たまかりを、いたす時、かうてい

をふの、くわんねいに、くわてき

かうつくしきひめきみを、一人

もち候へとも、このひめをしつめ候

へきために、一人ひめなれとも

国たすへきやうに、を

ひくわのきの、うすきふねを

ほんさういたし、かのひめを

ふねに、つくりこめ、あく風に

まかせて、うみのをもてに、いた

し、せうふるかたゑをも

むけわたされたり、あく

ふふ、ふきわたしたるこふね

をみて、とりあけ、うちわり、みて

あれは、申にをよはず、ひめ

一人、をわしけるを、御ミわ

いかやうなる人の、御こにて候そや

かのわれら、すむところにて

わたらせたもふ事、二たひに

ひめきミ、あふせ候、いかにきちん

にて、わたりたもふとも、かの

ひめきみか身をは、たのみ入

候とて、きちんにむかつて

あふせ候へは、きちんは、うち

よろこひ、かのひめきみを

ぬしのすみかゑ、うつし申

候て、ちきりをこめ申ッ、  
 ほとなく、ことも、出きたり  
 又、七ねんの間に、ほとなく  
 七人のこを、もうけたり  
 しうは、ひめきみに、心を  
 許るし、さうたん、申候へは  
 ひめきみをふせ候には  
 御ミをは、人けのみに、  
 させたまふところは、御ミの  
 ミにわ、わたりたまふそ  
 や、さんし候、いこにもつ時  
 くろかねを、ゑしきにあた  
 ゑるほとに、それかつもりて  
 身のミわ、やもかたなも、た  
 たし候な、それかし斗  
 人はたに、にたるところわ  
 候なり、ひめきみ、頃さうたん  
 を、御き、さためて、うれしく  
 おほしめし候、人はたのとこ  
 ろを、きくへき斗に、七  
 ねん、ちきりをこめ、た  
 いしゆうを申候をや、くわ  
 てきとのゑ、にけもとらは  
 やと、おほしめし候を、せうハ  
 このたくミを、すこしも  
 知らす候、いせんのひめの御  
 心なる事をおもひ、心を  
 のこさす、さうたん申候

ひめ、うれしくおほし  
 めし、あの人けんなる方  
 ほうのすみかゑ、わこのうみの  
 をむきは、いかやうにして  
 いかせたもうそや、あのミき  
 はに、きし、しらせんにて、人  
 さとゑわ、はせ候、あのしゆせん  
 にわ、た、のりても、わかゆき  
 たきかたへ、しり候へきかと  
 をふせ候とて、ともへに、御き、  
 候へは、しりへこたゑて、申やう  
 さん候、あのしゆせんに、のり  
 候へは、かせにまかせて、わか  
 ゆくさとゑ、うかれつき候、ひめ  
 ハ、しのひに、しうをも  
 いらい、わけあるへきしまい  
 をなされ候、きちんに、をふ  
 とうなし、すこしも、しらせ  
 候、せうかあめすに、みきハ  
 ゑ、御いて候ゑ、ふねに、ちか  
 つきなされ候、いたわしや、ひめ  
 きみハ、かみのおもひて、をとない  
 となたをも、しらせ、御ゆう  
 はうへんなれば、しいかせ  
 いそき候、しうい、ひめきみの  
 御にけはしりを、すこしも  
 知らす、いたり候、七人のこの  
 うちに、ちふさにつくほと

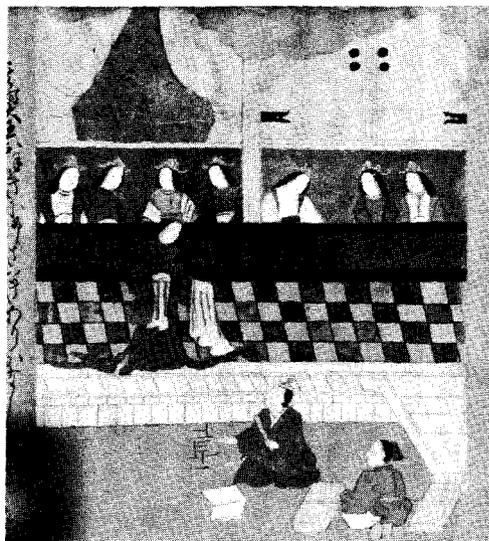
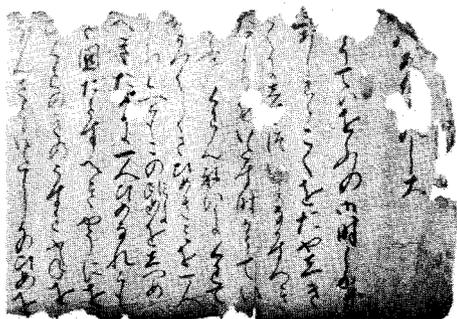
こを、一人、そのこをは、みき  
 のうらふとに、そへて、御にけ候  
 ひめきみハ、ほとなく、くわんのん  
 十一めん（当方）のほうへんにて、ほと  
 なく、とうほうに御つき候  
 をや、くわてきとの、あい御申  
 あり、一に、しうは、そうたん

（付記 満友寺住職鎌田龍公氏、成就院住職武田清寿氏の両氏に  
 は、資料の借り出し、写真撮影、翻刻等、大変お世話になりま  
 した。記して感謝申しあげます。）

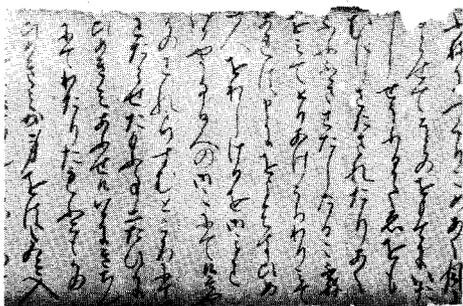
参 考



（『熊野の本地』冒頭部分）



（『熊野の本地』第2図）



（『ハッあ[ ]のし大』冒頭部分）